

を行い、横行結腸に境界明瞭な発赤浅陥凹を認めた。9ヶ月後にも同様の所見が存在したため生検を行い、group 5、高分化型腺癌と診断された。注腸造影での摘出を試みるも術前には病変を指摘し行なかつた。発見から13ヶ月後に横行結腸切除術を施行。病理学的には、径6×6mmのIIc型大腸癌で、深達度はm、腺腫成分は混在せず、周囲に上皮の反応性過形成はなく、癌粘膜は正常粘膜に比し菲薄な絶対的陥凹型大腸癌であった。術前の注腸造影を再検討した結果、わずかな造影剤の貯りを見出した。注腸による摘出は難しく、内視鏡による発見の増加が期待される。

16) 大腸微小病変の色素拡大観察

本間 昭・味岡 洋一  
小宮 隆瑞・若林 泰文 (新潟大学第一病理)  
野田 裕・山口 正康  
渡辺 英伸

電子スコープの進歩に伴い、その特性を生かし粘膜表面性状の精密な観察が可能となりつつある。従って従来の通常肉眼観察では見逃されがちな微小病変を発見して行けることが期待される。今回我々はホルマリン固定された外科切除材料を用いメチレンブルー染色下、実体顕微鏡にて粘膜微細表面性状の水中観察を行い、上皮性腫瘍病変の表面性状を1) 類円型、2) 乳頭型、3) 管状型、4) 分枝型の4型に分類した。更にこれらの剖面組織像との対応を行った結果、類円型、乳頭型は非腫瘍性病変に、管状型、分枝型は腫瘍性病変にはほぼ対応した。

以上、微細表面性状の観察は大腸の病変を診断する上で重要な項目と考えられた。

17) 温熱療法と動脈内 one shot 療法の併用により著明な縮小を示した上行結腸癌の1例

柴崎 浩一・前田 裕伸 (日本歯科大学)  
曾我 憲二・相川 啓子 (新潟歯学部)  
豊島 宗厚 内科

症例は49歳 男。昭和61年9月腹部腫瘤に気づき某病院を受診。上行結腸癌 (Stage IV) と診断されたが、切除不能なため回腸-横行結腸吻合術を受けた。昭和62年12月腫瘤が増大するため精査。加療の目的で当科に入院した。入院時、38℃の発熱、貧血および腹部に20×19cmの表面凹凸不正な、大きな腫瘤を認めた。検査成績でも白血球数・血小板数の増加、LDH・CEAの上昇を認めた。温熱療法開始2回目頃より腹部膨満感は軽減し、3

回終了頃より腫瘤も縮小しはじめた。その後、肝動脈内 one shot 療法を併用したところ腫瘤は急速に縮小し、検査データも改善した。温熱療法9回終了の現在、腹部は平坦となり画像診断上からも腫瘤の大きさは治療前の80%以上の縮小を示し、周囲臓器との癒着も少なくなったことから切除を予定している。

18) 潰瘍性大腸炎に再生不良性貧血を合併した1症例

吉田 英春・斉藤 征史 (県立がんセンター)  
吉岡 秀樹・加藤 俊幸 (新潟病院 内科)  
丹羽 正之・小越 和榮

症例は昭和53年1月、直腸型の潰瘍性大腸炎 (U.C.) で発症した66才女性。緩解再燃型を呈し、病変は次第に脾屈曲部まで広がった。治療は緩解時に SASP 2.0g 内服、再燃時には SASP 3.0g に増量及びステロイド併用で外来加療した。発症より約9年後、WBC 2700、RBC 216万 Hb 8.0、plat 1.4万と汎血球減少症を認め昭和61年11月入院。骨髓所見より再生不良性貧血と診断。外来治療薬を中止しステロイド大量療法、蛋白同化ホルモンで加療したが改善せず昭和62年2月死亡した。U.C. に再生不良性貧血を合併した報告は本邦ではない。SASPの副作用では2.0g内服後9日目に再生不良性貧血を生じた例やSASPの長期内服の既往後、赤芽球形、巨核球形の骨髓低形成を生じた報告がある。本症例も9年間の長期内服後ではあるがSASPが関与して生じた再生不良性貧血の可能性がある。SASP内服時には定期的な血液検査を施行し骨髓低形成の出現に十分注意する事が必要である。

19) サラゾピリンの脱感作療法を行った潰瘍性大腸炎の2例

銅冶 康之・早川 晃史  
藤田 一隆・月岡 恵 (新潟市民病院)  
何 汝朝・市井吉三郎 (消化器科)  
木村 明

サラゾピリンは潰瘍性大腸炎の治療薬として重要であるが、約2～3割の人に皮疹、肝機能障害などの副作用が見られ、代りにステロイドの投与をせざるをえないことがある。

今回我々は、近年その有効性が高いと言われている、Holdsworthのサラゾピリン脱感作療法を、サラゾピリン過敏症で皮疹、肝機能障害などが出現したことのある潰瘍性大腸炎患者2例に対し施行した。結果は、2例と